

那珂市名誉市民紹介

しらと まつきち
(故) 白土 松吉 氏

明治14年10月2日〜昭和31年12月10日
(1881年) (1956年)



◆功績の概要◆

明治14(1881)年、那珂郡三反田村(現在のひたちなか市)に打越家の次男として生まれ、後に同郡湊町(旧那珂湊市)の白土家へ養子に入りました。幼少期から農業に熱心に取り組み、18歳で農会総代を務め、県農事講習所で学び、明治34(1901)年、20歳の時に県立農学校に入学しました。

明治38(1905)年、県立農事試験場技手となるも2年間勤務し退職し、明治42(1909)年、那珂郡役所技手と郡農会技手を兼務しました。氏は、那珂川と久慈川に挟まれ、しばしば干害に苦しんでいた那珂台地の農業経営の安定を図るため、干ばつに強く痩せ地にも栽培できるサツマイモに着目し、増収栽培の研究に専念しました。当時、農家の副業として「甘藷切り干(別名 乾燥いも)」が作られ、主に東北地方に出荷されており、日露

戦争時は戦地に送られたため「軍人いも」ともいわれていました。明治44(1911)年には、那珂郡農会は干ばつに強く、加工して付加価値を高める甘藷切り干しは、農閑期である冬の農家収入の安定化に重要であると考え、静岡県から講師を招き講習会を開催しました。大正7(1918)年には、自ら甘藷加工に着手し、茨城県をして干しいもの特産地たらしめました。

その後、更なるサツマイモの増産に取り組むべく、試験地を菅谷農学校と小瀬農学校に設け、担当教諭と連携し甘藷栽培の研究・改良を進め、収穫量を増収させる栽培法を確立しました。その後も、技術的に解りやすく、経済的で合理的な栽培方法の確立に向けて精力的に研究を続けた結果、昭和12(1937)年に画期的な「白土式甘藷栽培法」を完成させました。

また、戦時下において、サツマイモはアルコール原料、主食である米の代用食として増産が奨励され、氏は菅谷

に住んで10アールの土地を借地し、日夜研究に打ち込んでいました。昭和17(1942)年には、農林大臣邸で開催された甘藷増産懇談会に招かれ、大戦下の食糧増産に寄与し、それ以来「さつまの神様」「甘藷先生」「昭和の青木昆陽」として、氏の名声は全国へ広まりました。

一方、那珂川左岸流域水田の重要な灌漑用水である小場江堰の改修にも努力し、一部反対者の深刻な妨害にも屈することなく、日夜講演会・座談会を開催し、大正12(1923)年度に竣工、那珂川沿岸1,000ヘクタール余を干害から救いました。

昭和20(1945)年、指導を受けてきた農業関係有志は、献身的な指導であった氏に対し、芳野村戸崎(現在の那珂市戸崎)に6ヘクタールの土地を贈り「白土甘藷研究所」を建設しました。

生涯をかけて尽力した農業振興の偉業は、本県農業史上に燦然と輝くものであり、高松宮殿下や県知事の表彰を受け、昭和30(1955)年には、黄綬褒章の栄誉に浴しました。晩年は、白土甘藷研究所で自らサツマイモの栽培に従事し、研究に精進していましたが、昭和31(1956)年に76歳で病没しました。

◆名誉市民選定の理由◆

氏が生涯をかけて尽力した農業振興の偉業は、戦中戦後の食糧難から人々を救っただけではなく、現在の那珂市の特産品であるサツマイモを原料とした「干しいも」の一大産地としての礎を築いた功績は大きなものがあります。市民が郷土の誇りとしてひとしく尊敬する者と認められるため、名誉市民として選定しました。

【略年表】

1881年(明治14年)	勝田村三反田で生まれる
1901年(明治34年)	茨城県立農学校へ入学
1907年(明治40年)	湊町白土家の婿養子となる
1909年(明治42年)	那珂郡役所に入り農業技手としてサツマイモの研究に取り組む
1911年(明治44年)	サツマイモ増産試験を菅谷及び小瀬の農学校で開始
1926年(昭和元年)	白土式甘藷栽培法に成功する
1937年(昭和12年)	同栽培法の技術的体系が完成
1943年(昭和18年)	内原満蒙開拓青少年義勇軍訓練所の教師となる
1948年(昭和23年)	白土甘藷研究所を設立
1955年(昭和30年)	黄綬褒章を受章する
1956年(昭和31年)	76歳で逝去